

国際保健医療福祉学分野

論文

A 欧文

A-a

1. Orita M, Fukushima Y, Yamashita S, Takamura N: The need for forest decontamination: For the recovery of Fukushima. *Radiat Prot Dosimetry* 175(2): 295-296, 2017. (IF: 0.917)
2. Murakami M, Sato A, Matsui S, Goto A, Kumagai A, Tsubokura M, Orita M, Takamura N, Kuroda Y, Ochi S: Communicating with residents about risks following the Fukushima nuclear accident. *Asia Pac J Public Health* 29(2_suppl): 74S-89S, 2017. (IF: 0.811)
3. Orita M, Nakashima K, Taira Y, Fukuda T, Fukushima Y, Kudo T, Endo Y, Yamashita S, Takamura N. Radiocesium concentrations in wild mushrooms after the accident at the Fukushima Daiichi Nuclear Power Station: Follow-up study in Kawauchi village. *Sci Rep* 7(1): 6744, 2017. (IF: 4.259)
4. Shimizu Y, Sato S, Koyamatsu J, Yamanashi H, Higashi M, Nagayoshi M, Kadota K, Kawashiri SY, Takamura N, Maeda T: Serum sodium level within the normal range is associated with maximum voluntary tongue pressure against the palate among community-dwelling older Japanese men. *Geriatr Gerontol Int* 18(1): 183-186, 2017. (IF: 2.351)
5. Yamanashi H, Shimizu Y, Higashi M, Koyamatsu J, Sato S, Nagayoshi M, Kadota K, Kawashiri S, Tamai M, Takamura N, Maeda T: Validity of maximum isometric tongue pressure as a screening test for physical frailty: Cross-sectional study of Japanese community-dwelling older adults. *Geriatr Gerontol Int* 18(2): 240-249, 2017. (IF: 2.351)
6. Yokota K, Mine M, Kondo H, Matsuda N, Shibata Y, Takamura N: Cancer mortality in residents of the terrain-shielded area exposed to fallout from the Nagasaki atomic bombing. *J Radiat Res* 59(1): 1-9, 2017. (IF: 1.788)
7. Shimizu Y, Sato S, Noguchi Y, Koyamatsu J, Yamanashi H, Higashi M, Nagayoshi M, Kadota K, Kawashiri SY, Nagata Y, Takamura N, Maeda T: Impact of single nucleotide polymorphism on short stature and reduced tongue pressure among community-dwelling elderly Japanese participants: a cross-sectional study. *Environ Health Prev Med* 22(1): 62, 2017. (IF: 1.133)
8. Nagayoshi M, Higashi M, Takamura N, Tamai M, Koyamatsu J, Yamanashi H, Kadota K, Sato S, Kawashiri SY, Koyama Z, Saito T, Maeda T: Social networks, leisure activities and maximum tongue pressure: cross-sectional associations in the Nagasaki Islands Study. *BMJ Open* 7(12): e014878, 2017. (IF: 2.369)
9. Tsuchiya R, Taira Y, Orita M, Fukushima Y, Endo Y, Yamashita S, Takamura N: Radiocesium contamination and estimated internal exposure doses in edible wild plants in Kawauchi Village following the Fukushima nuclear disaster. *PLoS One* 12(12): e0189398, 2017. (IF: 2.806)

B 邦文

B-a

1. 吉田浩二, 新川哲子, 浦田秀子, 高村 昇 福島第一原子力発電所事故後における 福島県内保健師のメンタルヘルス ストレス対処能力からの一考察 日本放射線看護学会誌 VOL.5 NO.1 2017

学会発表数

A-a	A-b		B-a	B-b	
	シンポジウム	学会		シンポジウム	学会
6	1	0	7	0	0

社会活動

氏名・職	委員会等名	関係機関名
高村 昇・教授	環境放射能研究所 研究連携推進会議委員	福島大学環境放射能研究所
高村 昇・教授	疫学部顧問	公益財団法人 原子力安全研究協会
高村 昇・教授	支援センター運営委員会 委員	公益財団法人 原子力安全研究協会
高村 昇・教授	福島県放射線健康リスク管理アドバイザー	福島県
高村 昇・教授	非常勤嘱託	アルパイン株式会社
高村 昇・教授	建築審査会委員	長崎県

高村 昇・教授	(財)放射線影響研究所 臨床研究部顧問	(財)放射線影響研究所
高村 昇・教授	福島県民健康管理調査検討会委員	福島県
高村 昇・教授	日本放射線看護学会評議員	日本放射線看護学会
高村 昇・教授	環境放射能研究所研究連携推進会議委員	国立大学法人福島大学
高村 昇・教授	長崎市原子爆弾放射線影響研究会委員	長崎市原子爆弾放射線影響研究会事務局
高村 昇・教授	福島県川内村健康アドバイザー	福島県双葉郡川内村
高村 昇・教授	長崎ヒバクシャ医療国際協力会運営部会委員	長崎県、長崎市
高村 昇・教授	非常勤講師	広島大学
高村 昇・教授	環境創造センター交流棟展示等検討会委員	福島県生活環境部（環境創造センター）
高村 昇・教授	放射線と健康アドバイザー	福島県保健福祉部
高村 昇・教授	風評払拭・リスク強化アドバイザー会合外部有識者委員	復興庁 原子力災害復興班
高村 昇・教授	安全・安心対策検証委員会委員	公益財団法人原子力安全研究協会
高村 昇・教授	除染情報プラザ運営委員会委員	環境省東北地方環境事務所
高村 昇・教授	楡葉町放射線健康管理委員会委員	福島県双葉郡楡葉町
高村 昇・教授	中間貯蔵除去土壌等の減容・再生利用技術開発戦略検討会委員	環境省水・大気環境局
高村 昇・教授	相談員制度の運用に関する実務者会合委員	内閣府
高村 昇・教授	雲南市原子力安全顧問	島根県雲南市
折田真紀子・助教	内部被ばく技術検討会委員	公益財団法人 原子力安全研究協会
折田真紀子・助教	外部被ばく技術検討委員	公益財団法人 原子力安全研究協会
折田真紀子・助教	トレーナーズトレーニングの講師	公益社団法人 日本アイソトープ協会

競争的研究資金獲得状況（共同研究を含む）

氏名・職	資金提供元	代表・分担	研究題目
高村昇・教授	日本学術振興会	代表	基盤研究（B） 「福島の今後を見据えたチェルノブイリにおける疫学研究の展開」
高村昇・教授	日本学術振興会	代表	基盤研究（C） 「福島県川内村におけるキノコ・山菜マップの作成：復興再生に向けたモデルケースの構築」
高村 昇	環境省	代表	「富岡町を基盤とした帰還住民とのコミュニケーションに資する科学的エビデンスの創出」
折田真紀子	日本学術振興会	代表	若手研究（B）「福島県川内村における食材中の放射性物質濃度のデータベース化と住民のリスク認知評価」
高村 昇・教授	アルパイン(株)		内部被ばく線量評価

その他

非常勤講師

氏名・職	職（担当科目）	関係機関名
高村 昇・教授	非常勤講師（大規模災害と国際協力）	広島大学

新聞等に掲載された活動

氏名・職	活動題目	掲載紙誌等	掲載年月日	活動内容の概要と社会との関連
高村 昇・教授	放射線・放射性物質 Q&A	福島民報	2017年 3月1日	福島県内では除染しても空間線量率が0.23 マイクロシーベルト/時を下回らない地域があるが、このような場所で1年間生活したとしても健康影響は見られないと述べた。
高村 昇・教授	放射線・放射性物質 Q&A	福島民報	2017年 3月2日	避難解除準備区域と居住制限区域において、個人被ばく線量を解析すると1 ミリシーベルト/年を超える線量に相当するケースもあるが、年間1 ミリシーベルト以内に収めるというのは平時の放射線防護の基準であり、これを超えたら健康影響が見られるというものではないと述べた。
高村 昇・教授	放射線・放射性物質 Q&A	福島民報	2017年 3月3日	原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR）が、福島第一原発事故の健康影響に関する報告書の改訂版を2016年に出したが、大部分が2013年報告書の主要な仮定の一つまたは複数を追認する内容であった。今後も定期的にこのような報告書が作成されることが予想されると述べた。
高村 昇・教授	放射線・放射性物質 Q&A	福島民報	2017年 3月4日	チェルノブイリ原発事故の影響を受けたことによる甲状腺がんの発症と福島との甲状腺がんの発症とは状況が大きく異なり、今後も因果関係について科学的に検討する事が重要であると述べた。
高村 昇・教授	放射線・放射性物質 Q&A	福島民報	2017年 3月6日	自家製野菜に含まれる放射性セシウム濃度が気になる場合は各市町村で簡易分析を行う体制が整っている。だが、現在野菜から検出される頻度は極めて低いと述べた。
高村 昇・教授	放射線・放射性物質 Q&A	福島民報	2017年 3月7日	山菜の中には比較的高頻度に放射性セシウムが検出されるが、種類によってその頻度は異なる。しかし、基準値を超えた山菜を数回食べたとしても基準値の設定が厳しくなっているため、健康影響があるとは考えにくいと述べた。
高村 昇・教授	放射線・放射性物質 Q&A	福島民報	2017年 3月8日	食品中の放射性セシウムの基準値は1 キロあたり 100 ベクレルと定められているが、これを一年間毎日食べたとしてもレントゲン写真1回の被ばく線量の半分以下であり、健康影響は見られないと述べた。
高村 昇・教授	放射線・放射性物質 Q&A	福島民報	2017年 3月9日	福島県における甲状腺がん、またはその疑いと診断されたその多くは、精度の高い検査を行うことで放射線と関係ない、以前から一定割合ある「潜在がん」を見つけている可能性が高いと述べた。
高村 昇・教授	長崎大学の富岡町における復興推進拠点設置	長崎新聞	2017年 3月9日	富岡町は一部地域を除き4月1日に避難指示解除となった。しかし戻りたいと考えている町民は全体の16%。長崎大学は役場に復興推進拠点を置き、住民の

				健康相談や放射線量測定といった活動の頻度を高め、帰郷する人を増やしていきたい。
高村 昇・教授	「放射線・放射性物質 Q&A」の第4巻発行	福島民報	2017年 3月10日	福島民報で連載した Q&A の中から特に県民の関心が高い項目を中心に一部加筆している。県放射線健康リスク管理アドバイザーの高村昇教授が回答者を務め、冊子は県を通して全市町村に配布し活用される。
高村 昇・教授	放射線・放射性物質 Q&A	福島民報	2017年 3月10日	福島県県民健康調査での甲状腺検査でこれまで100人以上が甲状腺がん、またはがんの疑いと診断されたが、事故による放射線被ばくとの因果関係は年齢的に考えにくいと述べた。
高村 昇・教授	放射線・放射性物質 Q&A	福島民報	2017年 3月11日	福島県県民健康調査で見つかった甲状腺がんは、地域によつての発症頻度は全域でほぼ同じであり、福島第一原発の近くにいたから甲状腺がんが多いという事はなかったと述べた。
高村 昇・教授	放射線・放射性物質 Q&A	福島民報	2017年 3月12日	福島県県民健康調査は、対象となっている方が県外に行っても、全国で甲状腺検査を受けられるようになっている。
高村 昇・教授 折田真紀子・助教	川内村での拠点報告会	福島民報	2017年 3月17日	長崎大学原研国際の主催、川内村にて復興支援や調査研究活動の報告会を行った。
高村 昇・教授 折田真紀子・助教	「放射線・放射性物質 Q&A」4巻発行	福島民報	2017年 3月17日	長崎大学は、福島民報での連載「放射線・放射性物質 Q&A」をまとめた冊子の第四巻二万五千部を県に寄贈した。
高村 昇・教授	東日本国際大学・いわき短期大学 長崎大学と協定	福島民報	2017年 4月27日	いわき市の東日本国大大学といわき短期大学は、福島第一原発事故からの復興を担う人材育成を目的に連携協定を締結した。
高村 昇・教授 平良 文亨・助教	長崎で原発事故と食の安全シンポジウム開催	長崎新聞	2017年 5月14日	東京電力福島第一原発事故で食品の安全が脅かされたことをテーマに被爆地の長崎市でシンポジウムを開き、川内村で計測した結果を発表した。
高村 昇・教授 平良 文亨・助教	長崎で「震災に係る食料問題フォーラム」開催	福島民報	2017年 5月14日	被爆地の長崎市で食料問題フォーラムが開催され、原発事故に伴う風評が根強い件さん農林水産物の安全性とおいさを消費者にどう理解してもらおうか専門家と参加者が意見を交わした。
高村 昇・教授 平良 文亨・助教	食の安全 長崎で日本学術会議フォーラム開催	福島民友	2017年 5月14日	東日本大震災と東京電力福島第一原発事故で被害を受けた農林水産業の復興を議論する日本学術会議で風評対策などについて長崎大の研究者や専門家が研究発表した。
高村 昇・教授	長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 活動25年	読売新聞	2017年 8月1日	NASHIM 発足から25年、300人以上の海外の医療関係者を招き、被ばく医療の人材育成を行ってきた。
高村 昇・教授	長崎大学、国立北西医科大学と連携	長崎新聞	2017年 9月13日	長崎大は国立北西医科大学と連携して、国際的な被ばく医療の専門家の育成に取り組むと発表、福島原発事故を経験した日本とチェルノブイリ原発事故で被

				害にあったロシア、ベラルーシの医大で相互に学生を学ばせる。
高村 昇・教授	食の安全・安心アカデミーシンポジウムが郡山市にて開催	福島民報	2017年 11月4日	福島県郡山市にて食の安全・安心アカデミーシンポジウムが開催され消費者が安全な福島県食材への理解を深め、川内村での支援活動、山菜やキノコの放射線セシウムについて説明した。
高村 昇・教授	福井大学、敦賀で防災・日本再生シンポジウム開催	福井新聞	2017年 11月26日	福井大の防災・日本再生シンポジウム「日本一の原子力立地 福井県における防災危機管理」において事故に備え人材育成の重要性を述べた。
高村 昇・教授 折田真紀子・助教	放射線と健康への影響～福島の復興と現状～情勢講演会	静岡新聞	2017年 12月17日	放射線の性質を正しく理解し、正しく怖がるためのポイントについて講演した。